

日付:2014年11月30日／聖書:エレミヤ書33:14~16

主題:「二つの時を生きる」

2014年—キリスト降誕から2014年、戦後70年、われわれキリスト者は二つの時を生きている。この二つの時のどれを忘れてもわれわれは生きられない。この国は今、高度成長から低成長時代へと入り、社会はいろんな意味で病んでいる。年間3万人の自殺者があるという。毎日の事件事故は目をおうものがある。不条理で理解し難いものがある。神と人間の関係の破れがある。

旧約エレミヤの時代と同じような傷を負っている。これはなぜなのか。キリスト降誕の季節を前にどうしたらこの傷は癒されるのか、問われている。バビロニア軍に征服されたイスラエルの荒廃と苦難に対抗して、預言者は結婚式、賛美と礼拝、若者の希望と喜びが描写される—11節。再生と再建の希望が語られる。これは日本の原発事故と相次ぐ土砂災害へと思いが重なる。エレミヤの予言には、緊迫感あり、印象的である。エレミヤについては特に、無教会の人たちが重く用いている。内村鑑三始め、矢内原忠雄、高橋三郎などがエレミヤを高く評価する。私がキリスト教に触れるのは、高校時代に矢内原の那覇での「エレミヤの平和預言」という講話がきっかけでした。その後、高橋三郎に導かれます。彼らは誰もエレミヤを「悲哀の人」と呼びます。その彼が人間の傷を癒すのは神以外にはいないというのです。人間の「死に至る病」とは何か。それが神との関係の破れである、とエレミヤは言うのです。

エレミヤと同じような危機の時代に生きる今日、私たちは神の声に聴くほか道はないのです。政治の力は無力に近い。まことの癒しをもたらす神にこそ聞くべきです。今こそキリスト者と教会は神の声を世界へ向けて発信すべきです。まさに現代キリスト者と教会の神学的実存が問われています。

バビロン捕囚でエルサレムは陥落、神殿も破壊されています。そうした亡国と荒廃の中でエレミヤは幻の中に、新しいエルサレムを仰ぎ見るのです。「主はわが救い」と確信したのです。説教者も同じ役目を負うのです。このただ一つに、全福音はかかっています。わたしたちは二つの時を生きるのです。(名護)